全詩集大成

現代日本詩人全集

第八卷

北川冬彦　安西冬衛　吉田一穂　金子光晴

創元社　刊

全詩集大成

現代日本詩人全集

8

第三回配本

定價 450 圓

昭和29年1月30日 發行

著者代表 金子光晴（かねこみつはる）

發行者 小林茂
東京都中央區日本橋小舟町2ノ4

印刷者 淺野剛
東京都大田區田園調布1ノ1314

發行所 株式會社 創元社
東京都中央區日本橋小舟町2ノ4
（大阪市北區樋上町45）
電話（茅場町）1734, 2064, 4083
振替・東京 1565, 大阪 57099

萬一落丁亂丁がありましたら御取り替え致します

印刷所 金羊社
製本所 鈴木製本所
本文用紙 東洋製紙株式會社特漉
本文用紙納入 市瀬洋紙店
クロス 日本クロス株式會社特製

現代日本
詩人全集　第八巻

目次

金子光晴

自傳　六
こがね蟲　二
水の流浪　三六
鱶沈む　四九
鮫　四四
落下傘　六七
蛾　八七
女たちへのエレジー　一〇八
鬼の兒の唄　一三一
金子光晴詩集　一四五
人間の悲劇　一四五

吉田一穂

自傳　一八四
海の聖母　一八八
故園の書　一九七
稗子傳　二三三
未來者　二三六
羅甸薔薇　二三九
吉田一穂詩集　二三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安西冬衛

自傳 …… 三四
軍艦茉莉 …… 三八
亞細亞の鹹湖 …… 三七
渇ける神 …… 二六〇
大學の留守 …… 二七四
韃靼海峽と蝶 …… 二九六
座せる鬪牛士 …… 三〇三

北川冬彦

自傳 …… 三三
三半規管喪失 …… 三三〇
檢温器と花 …… 三三
戰爭 …… 三九
氷 …… 三四
いやらしい神 …… 三三七
實驗室 …… 三四五
蛇 …… 三五四
夜陰 …… 三六一
氾濫 …… 三七七
花電車 …… 四〇六
北川冬彦詩集 …… 四一八
馬と風景 …… 四三〇
解說（伊藤信吉） …… 四一八
編集後記 …… 四三五

裝幀　恩地孝四郎

目次凡例

一、巻頭の總目次は、本巻收錄詩人の詩集全冊をその刊行順に掲げた。

一、各詩集の內容目次は詩人ごとに一括して、その冒頭に收めた。

一、本文中の或る詩集については、原詩集の內容をそのまま、そつくり收めていないものがあるが、それは左の二つの理由によるものである。

(1) 著者の意向乃至その他の理由により削除する必要を生じた場合。

(2) 前掲詩集からの再錄詩篇である故、重複をさけるために削除した場合。

但し、目次の上ではその單行形態を完全に再現せしめるため、本文の內容とは關係なく、單行詩集ごとにその全內容を明示することにした。方法左の如し。

(イ) * 印は著者の意向乃至その他の理由により削除されたることを意味する。

(ロ) ・印は本書本文中の他の箇處に既出のため、削除した詩篇又は詩集名を示す。

(ハ) 再出詩篇が連續している場合又は或る章題下に再編されている場合、當該詩篇群は・印のもとに追込みにて組込むことにした。

金子光晴

女子がたの歌

一、

燈を背さふ。そのうちもうあけがただよ。
水鹿のあま音をはかすまつのやうな
銀杏のあをあをあけ。
ひらかれた底からなかれつる
愛やみな非心粘。

紙鶴。このひとときには、それぞれ、うすぼけた紙きれとしかみえない。
底なしの風景は、一らけきって、ねざめきめの

自傳

明治二十八年十二月二十五日、愛知縣海東郡津島宇日光で大鹿和吉三男として生れた。保和と命名、三歳で、清水組（建築請負業）名古屋支店長金子莊太郎に養子緣組、金子姓を名のる。六歳の時、養父は京都の支店長に轉任、京都市上京區東竹屋町に住居し、夷川の銅駝小學校の尋常科四年を卒業、一家をあげて東京に移り、銀座三丁目堀に住み、泰明小學校を一年、牛込新小川町の新居にうつつて、津久戸小學校に轉校、小學科程を卒へて九段上の曉星中學校に入學する。

最初は畫業を志し、牛込見付内に住んでゐた小林清親につけたてを學んだ。父莊太郎は趣味ゆたかな人で、てんこくは素人の玄人の域、一中節は、代地の菅野序遊について、段もの殆んど全部をあげてゐたといはれる。ふるい趣味の家庭に育つた私は、反動的に西洋の新風に憧れた。戀愛を夢み、キリスト教の洗禮をうけた西洋崇拜の少年は、地金にふるい教養と、身についた江都傳來の風俗習慣をもつてゐて、それが京傳三馬からモーパッサン、秋聲花袋にうけつがれた。小說家を志したのは、中學四年の時。ために、中學校卒業後、早大英文科を選ばせるにいたつた。一年半にて同校中退、オスカー・ワイルドに心醉す。東京美術學校の試驗に合格。三ヶ月で退學、慶應大學英文科に入學、又、一ヶ年にて退學。二十二歳の春、病褥に親しみ、その間、はじめて友人保泉良親のすゝめによつて、詩作をはじめる。加藤純之輔、小山哲之輔等と詩雜誌「構圖」を發刊。中條辰夫らと文藝雜誌「魂の家」を發刊。その頃より、思想的變化を將來、老莊家流のニヒリズムからE・カーペンターの民主思想の影響をうけるに至り、富田碎花、佐藤惣之助等と相識る。詩集「赤土の家」は、その當時の民衆派的色彩濃厚な詩篇をあつめたもの。一九一九年暮最初の渡歐。英京倫敦、白耳義の首都ブルッセル近郊ディーヘム等に二ヶ年を過し、ゼルハアランと、ボードレールの詩篇に接し、詩のなにものたるかをつかみえた自信を持つ。詩集「こがね蟲」をもつて、詩壇にデビュウする。「こがね蟲」の詩篇は、「大腐爛頌」とともに、在歐中の作品を、京都洛北等持院の茶室にこもつて推敲したもの。つゞいて詩集「水の流浪」を出版。森三千代と共著の「鱶沈む」は、江南旅行中の抒情詩をあつめたもの。それ以來、文壇の左翼派擡頭によつて、ポジションを失つた私は、生活的、思想的、苦惱を抱いて再度の渡歐を企てた。前後六七年にわたる苦しい放浪旅行のあひだ、殆んど詩筆を斷つたにひとしい。

歸國後、四十歳を越えて、ある偶然から、長詩鮫を雜誌「文藝」に發表、再度、詩人としての活動の機緣をえて、長い第二次世界大戰をあひだに挾んで今日まで、詩作生活をつづけてゐる次第である。殆んど十年間のブランクのあとで出した詩は、人民文庫版の詩集「鮫」、「女たちへのエレディ」にあつめられ、戰時中の反戰的な詩は、戰後の詩集「落下傘」「蛾」「鬼の兒の唄」に納められた。近く「人間の悲劇」を創元社から出した。じぶんとしては、生涯を賭けた大作を、今後いのちがあれば、書き上げてゆきたい希望をもつてゐるので、この全詩集の仕事だけで引導をわたされるのは、不服であり、早すぎるともおもふ。

詩集 こがね蟲
自序……一一
燈火の邦
雲……一三
三月……一三
時は嘆く……一四
翡翠の家……一五
章句……一六
誘惑
パラダイス……一六
悪魔……一七
春……一八
誘惑……一八
神話……二〇
幻術……二三
陶酔……二三
金龜子
二十五歳……二三
金龜子……二四
風雅帖……二四
五月雨の卷
鴛鴦の卷
紅葉の卷
拾遺二篇
熊笹……二五
鐘は鳴る……二六
散文詩
羅紗賣……二六
窓飾の妖精……二八
雪……二九
墳墓……二九
浴場……三〇
二十五歳の懶惰は金色に眠ってゐる(吉田一穂・跋文)……三一
詩集「黄金蟲」の跋にかへて(佐藤總之助・跋文)……三二
作品年表……三五
*發表一覧
詩集 水の流浪
自序……二六
水の流浪……二六
海の小品……二七
一 鴎
二 燈臺にて
新造船……二八
古靴店……二八
果實店……二九
色の深淵……二九
水母……二九
池のほとりの小品……三〇
一 誕生
二 水禽小屋
三 鯉
漂泊の歌……四一
航海……四二
一 水夫
二 喪禮
三 朝
人買船……四二
茂木、長崎にて……四三
海の夏
夕
磯
水の虚落に
古い港に
大埠頭にて
白い海
山上にて
出島岩壁にて
關門海峡
小驛
雷・女・くだもの……四五
Dans le Parc……四五
自然の部屋……四五
仙人掌の邦……四六
土管と季節……四六
コスモスの宿……四七
詩集 鱶沈む
舊都南京(謝六逸譯)……四九
古都南京……五〇
寒山寺……五〇
莫愁湖……五〇
虎丘……五〇
蘇州城……五一
短章……五一
双物
疾雨
街
ドンペ
寫景
西湖

初陽臺
魚樂園（アンコンクワンイ）
花港觀魚
桂魚
饑沈む……三三
渦……三三

詩集 鮫
自序……三四
ねっとせい……三五
泡……三六
塀……三七
どぶ……三八
燈臺……三九
紋……四〇
鮫……四一

*海鳳景……四九
天使……四〇
落下傘……四一
*犬……四二
*洪水・太沽ベーの歌・短章三篇・眺望……四三
*いなづまごはん……四三
*追放
屍の唄……四四

詩集 落下傘
序詩・あけがたの歌……四七
眞珠灣……四八
灣……四九

詩集 蛾
*奇蹟・さくら・鷹
東京の廢墟に立つて……五五
*わが生に與ふ
寂しさの歌……五五
跋（著者）……五八
解說（河盛好一郎）……五八

蛾
蛾 I……五九
蛾 II……六〇
蛾 III……六一
蛾 IV……六一
蛾 V……六一
蛾 VI……六二
蛾 VII……六二
蛾 VIII……六二
諷諭……六二
湖水……六三

薔薇
しやぼん玉の唄……六三
球……六四
玉……六五
牡丹……六五
湖畔吟……六六
夜……六七
雲烟……六八
雨……六八
肉體……六九
薔薇 I……七〇
薔薇 II……七一
薔薇 III……七一
薔薇 IV……七一
薔薇 V……七二
薔薇 VI……七三
無題……七三

三人
子供の徵兵檢査の日に……七三
富士……七四
戰爭……七四
三點……七五
床……七六
コットさんのでてくる抒情詩……七七
おもひでの唄……七七
五つの湖……七八

美女蠻
美女蠻……七八
あとがき……一〇〇

詩集 女たちへのエレジー
序……一〇〇
南方詩集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ニッパ椰子の唄……一〇〇
洗面器……一〇一
ボイテンゾルフ植物園にて……一〇一
無　題……一〇一
月光不老……一〇一
――シンガポール羅衛街にて……一〇一
旗……一〇一
馬拉加……一〇二
――シンガポールの市場で……一〇二
映　照……一〇二
Memo……一〇四
街……一〇四
縁　起……一〇五
牛乳入珈琲に献ぐ……一〇五
混血論序詩……一〇五
女たちへのエレジー……一〇六
ボルブドール佛蹟にて……一〇六
おでこのマレイ女……一〇七
どんげん……一〇七
雨三題……一〇八
一　エスプラネードの雨
二　ジョホール沖にて
三　芭蕉
無　題……一〇九
感　電……一〇九
子子の唄……一〇九

畫廊と書架

畫廊と書架……一一四

こころのうた

小　品……一一五
辯……一一六
牧野信一君の死に……一一六
信　頼……一一六
――一九四〇年の女たちに……一一六
死……一一七
湖畔にて……一一七
女への辯……一一七
――ある老嬢に……一一八
無　題……一一八
――蒼友片岡鐵兵の死に……一一八
ある女たちへ……一一八
偶……一一九
草……一一九
湖　水……一二〇
水……一二〇
フォンテンブロオのオテル・ド・エーグル・ノアールにて……一二一
文　殻……一二一
ア、ロ、ハ、オ、エ……一二一
茶子由來記……一二二

集詩 鬼の兒の唄

卵の唄……一二三
鬼の兒誕生……一二三
鬼の兒放浪……一二四
鬼……一二四
戀……一二五
瘤……一二五
冥府吟……一二六
海　戦……一二七
禿……一二七
黴……一二八
血……一二八
蜆の歌……一二八
風　景……一二九
骨片の歌……一二九
福助口上……一三〇
疱　瘡……一三〇
業　火……一三〇
鬼兄弟ジャズ團……一三一
一つの願ひ……一三一
肌……一三一
鬼と詩人……一三二
昇　天……一三二
地　獄……一三二
ネロと紂王……一三三
殷の紂王……一三三
桃太郎……一三三
鬼……一三四
鬼　蝋……一三五
跋（岡本潤）……一三六
あとがき……一三六

合集 綜詩 金子光晴詩集

こがね蟲
・（自序）・雲・三月・章句・パラダイス・春・誘惑・神話・二十五歳・金龜子・熊笹・鐘は鳴る
大腐爛頌（未刊詩集）
＊森・蒙古は來る・大腐爛頌・焔・沙漠・死・鷲・武藏野・戰場・寺・草刈り
水の流浪
・（自序）・水の流浪・海の小品（一　鷗・二　燈臺に

て）新造船・古靴店・果實店・色の深淵・水母・池のほとりの小品（一　誕生・二　水禽小屋・三　鯉）漂泊の歌・航海（一　水夫・二　喪禮・三　朝）人買船・茂木、長崎にて（海の夏・夕・磯・水の虚落に・古い港に・大埠頭にて・白い海・山上にて・出島岩壁にて・關門海峡・小驛）雷・女・くだもの・Dans le Parc・自然の部屋・仙人掌の邦・土管と季節・コスモスの宿

鱶沈む

舊都南京・古都南京・寒山寺・莫愁湖・虎丘・蘇州城・短章（双物・疾・雨・街・ドンペ・寫景・西湖・初陽臺・魚樂園・花港觀魚・桂魚）鱶沈む・渦

路傍の愛人（未刊詩集）

＊航海・ペダンの夜・南の女におくる・熱病・花見がへりの珈琲店・夜の酒場で・旅へ・Oriental・海の憂鬱・無題・海・小篇・小姐・屋上交響樂

鮫

・（自序）おっとせい・泡・塀・どぶ・燈臺・紋・鮫

女たちへのエレジー

・（まへがき）

・南方詩集

ニッパ椰子の唄・洗面器・ボイテンゾルフの植物園にて・月光不老・シンガポール羅衛街にて・旗・馬拉加・映照・牛乳入珈琲に献ぐ・混血論序詩・女たちへのエレジー・ボルブドール佛蹟にて・おでこのマレイ女・どんげん

こころのうた

小品・辯・死・湖畔にて・女への辯・――ある老簫に・無題・――舊友片岡鐵兵の死に・ある女たちへ・偈・文殻・茶子由來記

落下傘

・あけがたの歌序詩・眞珠灣・風景・天使・落下傘・犬・洪水・太沽バーの歌・短章三篇・いなづま・ごはん・追放・屍の唄・寂しさの歌・旗竿・こんくりの唄・（跋）

蛾

・蛾（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ）しやぼん玉の唄・球・牡丹・湖畔吟・夜・雲烟・雨・肉體・薔薇（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ）三點・コットさんのでてくる抒情詩・五つの湖・（あとがき）

鬼の兒の唄

・卵の唄・鬼の兒誕生・鬼の兒放浪・鬼・戀・瘤・風景・骨片の歌・業火・鬼兄弟・ジャズ團・鬼と詩人・昇天・地獄・桃太郎・鬼・（あとがき）

＊　えなの唄（未刊詩集）

太陽・えなの唄・かなしい眞珠採りの唄・奇怪な風景・無題

＊　赤土の家　その他

白鷺・日・赤土の家・おこたりの歌・唄・――新聞記事より・反對

＊短章（二十三篇）

＊老薔薇園（未刊詩集）

印度記・燐・玳瑁・老薔薇園・魚・龍・エルエルフェルトの首

＊　年譜

＊　解説（秋山清）

詩集　人間の悲劇

序……一三七

人間の悲劇……一三八

詩集

こがね蟲

C'est le privilège du Vrai genie, et surtout du genie qui ouvre une carrière, de faire impanèment de grandes fautes

Voltaire

自序

『時』の勝難い離愁は、寶石函のサフィールや、アメジストの夢を多面にする。

この心情の纖弱さや、跕蕩さ、華美さ、驕慢さは、何處の王宮から流謫されて來たものであらう。また、この阿片喫煙者の持つ『美しい幻影』と、覺醒時の遣方ない悲しさ、寂しさは……。

若し、『夢』の晴衣裳が無かつたなら、若し、『涙』がいつも、涸渇して居たら、此惻隱は、何たる慘めな地獄行であつたらう。

あゝ、余が、半生に贖ひ得た美しい疾患、『追想』は、唯一な我生涯の伴侶である。

"Mais les vrais voyageurs sont ceux-là Seuls qui partent pour partir ……"

(le voyage)

Baudelaire

(まことに、夢見る者のみが、『眞實の夢想家』であらう。

およそ、過去の所有する榮華は、人人を、『生の無心』から紛れさせ、落魄への、華やかな、痛恨多い經路を辿らせる。『追想』は、其廢宮廊である。)

かゝる愛慕と、長い徘徊から、余は、益々冷酷と、倦怠を撫育したが、總ての樂しからざる現存から、『詩歌』丈は、此後も、余を代償する任命を荷うてくれるだらうと信ずる。

何故ならば、余の、『崇高さ』や、『鮮新さ』に對する强い憧憬は、余の驕奢は、余の哀感は、又、眞實を希求める人間性は、『詩歌』の世界にのみ絶對無障礙であるからである。

此故に、深い『憂愁』にまで、余を知解する事は、いかなる遇難い友情であらう。

余の祕愛『こがね蟲』一卷こそは、余が生命もて賭した贅澤な遊戯である。倡優の如く余は、『都雅』を精神とし、願はくば、艷白粉、臙脂の屍臘とならうものを……。

『こがね蟲』は其綺羅な願である。

西曆一千九百十九年二月、余の歐羅巴旅行は積歳の膿漿を切解した。それは、永年の『懈怠』を、いみじくも脱套した。

余は『無目的』の爽快を呼吸した。

生涯の樂しい蜜月、ブルッセル郊外、ショーセー、ダックトに沿へる小村、デイーガムに居住せる六ケ月間、まことに、余は、一際の羈絆を忘れ、心ゆくばかり寛かな『煙草の時』を享樂した。

靜かな散策——心落著いた讀書三昧。樂しい詩作、さうした毎日の、孤獨な、然し、眞率な生活は、余が半生の靜かな回顧への、貴い機緣を殘してくれた。

余は、再びあひ難かつた、幼時代の純眞と、放膽と、虚榮に依つて、此期間、專心自身の肖像を畫き續けた。

心の廢址は、あやしくも、ワーウキックの大饗宴をひらいた。然し、夫は埃と熱の現實の饗宴ではなくて、余が心象に映る華やかな、幻燈に過ぎない。余は、たゞ空想と、此世の『美觀』との悲劇的な蒐集家であつた。

其風景は秋の收穫の樣に鬱やかで、狩場の歸路の樣に豪奢である。が同時に哀感的で、非現實的で、聰明である。

其空は、南方の、頭腦を壓へ付ける樣な重苦しい、官能の恐嚇で空虚になつた、底の知れない、暗い深淵ではない。寧ろ、人々の心情を澄明にする湖心であり、輝やかしい涙の玻璃質である。我々は、其處に大祭の金襴の樣な壯麗な壽崩壞を見る。夫は、熱情的であり、奢侈ではあるが、又悲傷的である。

人々を熱狂させるが、直ぎにさめ易く移ろひ易い。

其眩耀する光輝は、むしろ（過去）の姿を髣髴はせる、曇鈍であるが、同時に爽涼である。

夫は、ルーベンスから、ジョルダンスへテニエーへの華やかな淋しい白蠟の洋燈である。

古フランドルの此清澄な淨望は、我々旅行者に、第一の清新な古酒を饗應する。我々はイギリスでも、フランスでも、其清冽な盃を飲むことが出來ない。夫は放縱ではあるが、覺醒的である。快樂的であるが、敬しい信仰を一時も忘れてはゐない。

——（旅行記の一節より）——

あゝ然し、此壯麗な自然を爛る大火爐も、大膽な肉體の果實の房も、皆壞け易い珐瑯細工に過ぎない。そして我々旅行者にとって、フランドルの一切の夢は、グラス器の風景の樣に、淋しく殘つてゐる。

季節の葡萄酒は飲み干される。

あゝ凡そ、此グラス類程、艶麗な、誘惑的な、移ろひ易い物はない。

グラス器程、暗く、冷く、汚れ易い器はない。

グラス器程華やかな、同時に淋しい世界は無い。

——（旅行記の一節より）——

余が、余自身の詩作に就いて解說することは、すべて控へねばなるまい。何故なら、夫は、余の詩作が、直接に諸君に語るべきが順序である。あはれ、然し、純眞な胸の鼓動、誇高い額、韻律的な步調もて、サンカントウニエールの廣場を、テルビュールンの森の散策路を、さては、寺院や、風車の古風なハーレンを、いかにノスタルジックな、夢見る樂しい此『奪魂』が、詩句を摘む敬虔な欣びに耽りつつ步いたことか。又、いかに、上述の華やかに佗しいフランドルの大自然が、更に余が心裡に、ソロモン宮の如く『脆弱』と『豪華』の雲の峰を數多建築したか。いかに又、余の稚い感激の過敏性は、沸點から、零點を强速度に上下したことか。

何はともあれ、其時期以來、余の製作は、始めて、余の性情と、趣味に密接に交渉することが出來始めたのだ。十年近い摸索、亂雜な試彈、又、狂飈時代を過ぎて、やうやく、貧しいながらも、『味はふ』ことの比類ない法悅に到着したことである。

『フラマンの夢』、『水の踊子』等の試作についで、余は『龍王讃歌』の諸作を、製作し始めた。『こがね蟲』は其第一輯に屬する。余は、それらの製作から、自分自身の餘りに鮮明な、劃時期を喫驚した、新しい精神と、形態の『啓示』は、製作者を眩暈させるに足る。

余は、此『矜恃』と『熱情』を今も失はない。

あゝ、然し、欣喜にも、傲誇にも、追憶にも、悲哀にも、余の生涯の最も、光輝に充ちた、最も樂しかつた此滯歐の月日を、今は、過去に數へる。

歸鄕以來、此心の寂寞と、深い疲憊に、余は、第二の鄕愁の追慕者となつた。『こがね蟲』一卷は、此故にこそ、余にとつて、評價よりも別種な、二重の價に屬する。

それは、戀せし人の、其古い記念にも似て、他人には、只一つの錆びた髮留釦、只片方の色褪せた手袋の樣に、何の價値も、感激も、位しないかも知れないのであるが。

もしや、又たまさかな知遇が、この集の表面の景觀や、挿話の情感を通して、余の人間的氣質にまで、深く余に親接するならば、何故に、再び贅言を重ねよう！

たゞ、願はくば荒々しい『鞭』よ！

盲目の『鞭』よ！

此『夢』を苛酷く醒さざれ！

余は、この第一の欣びを、亡父の靈前に、さて、余の滯歐中、常に、善き刺擊を與へ、精進を助けてくれた Monsieur Ivan Lepage 氏に、又、余の知遇、富田碎花氏に、捧呈げる。最後に、出版に就いて、種々敎示してくれた長友增田篤夫氏に、又小集のために跋を約された吉田一穗君、佐藤惣之助君等の厚情に謝す。

立秋の日

金子光晴

燈火の邦

雲

一

雲よ。
榮光ある蒼空の騎乘よ。
渺か、青銅の森の彼方を撼動かし
こころ、王侯のごとく傲り
國境と、白金の嶺をわたる者よ。
お前の心情に榮えてゐる閲歴を語れ。
放縱な胸憂苦を語れ。

二

憂鬱兒よ、聞け。
それは、地上に春が紫の息をこめ、
微風が凉しい樹皮をめぐる頃
あゝ、暫く、思慕する魂が、寂寞の徑を散策し嘆く頃、
萌芽がいろ〳〵な笛を吹き鳴らす頃、
蕨の白い路を、野兎らのをどる頃、
山峽を繞る蒿色の喬木林は燃え、
金爛てらし眩ふわれらが意想と、精根は
亂れ燥がない私自らをどんなに裕々とうつしつつ
無邊の山上湖をわたつたか。
どんなに私らは賞揚し
どんなに私らは自負したか。
夕暮、
大火が紅焔のごとく、黑い寥林のうしろを走る頃まで
私らの無言の爆發は、朱色のしづかな天空をどんなにかぎりもなく優がしたか。
どんなに選ばれたものだけがつゞいたらうか。
どんなに數多い哀樂を、夢を追つたことか。

三

しかし、
この世の薫匂やかなすべての約束は忘られ、
茅詹の花は、冷たい土にまろび落ちる。
森の部屋は燥がしく、からつぽになつた。
蕪草は悲しみにまで屈いてしまつた。
いつしか私らは疾走する風の手にとらはれ
紅雀は發狂し
荊棘の、青空を翔ぶ。
荒寂れた田野は
悲しい柩の列をならべる。
憂鬱兒よ。
その時私らは運命を知りつくしたもののごとく失神する。
季節は只
悅樂のさだめに私を見送る。

三　月

一

あゝ、三月が近づいた。
金晴の曙の空は、
紅色の樹林は夢見つつ唄ふ。
綠樹の季節が近づいた。
草叢に鈴蘭の搖れる日は近づいた。
空氣が花花の賦粉と沒藥に咽び、
五官を持つ者の歌ひ、且つ歎く時は近づいた。
少年の物思の日は近づいた。
あゝ此身の記念の三月、美しい三月。

二

今日、紫の山山はうらうら霞み、
銀の雨は四阿のほとりの、金色の若草に降
りそそぐ。
それは、はじめての戀のめざめの歓欲か。
嬉しさに、悶えに惚々と聽入り、
黒髪熟く少女らは惱みみだれる。

庭園はひそめきや狂ほしい接吻の音にみち
みちて、
青篠竹や山櫨の結ひ垣の間を、
春の雨は、六絃琴の如く歌ひ連れる。
遂にはそれも悔の、嗚咽の單律と變る。

三

あゝ、三月が近づいた。
小川は萌黄の初草に、金紗の陽炎を投ぶげる。
野山はあてやかな衣裳に引映え、
小村は櫻柳、小米櫻に朧めく。
海岸に沿ふ波浪は狂噪に勞れ、薔薇色に眠り、
若者らが、潜に瞳を落し、
渺かに、散策し彷徨ふ頃は近づいた。
黄金より浪費する刻々は近づいた。
悲哀が、生涯の扉に、
美しい金鋏を打つ日は近づいた。
夜夜の寢苦しい頃は近づいた。
摘草に繪燈籠、花祭に、
一生に只一度の、
奇しき馴染の日は近づいた。
此世の蠱惑も、悲も、欣求も
なべてよりリトムの頃は近づいた。
あゝ、戀の三月、僞謾の三月。
私らが書籍を机に伏せ、
何もかも忘れて醉ふ時は近づいた。

時は嘆く

時は嘆く。
林園に黄金の花燭臺がならぶ頃、
六月の梢、梢が白孔雀のごとく物うげに眠る頃、
地上に、華舫のごとく牡丹花がちりし頃
黄蜂の唸りがそのまはりに光輪をゑがく頃
時はそんなに歡樂を急いでゐる。
時はそんなに歡樂を急いでゐる。

二

あゝ處女よ、
お前の唇は猩脂に燃え
お前の黒髪は潮の花に咽ぶ。
お前のまごゝろは海百合よりも放恣である。
お前の心の榮華は、おもひがけずも織出さ
れ、
鏡石の瞳は、かなしくうつり氣である。
みよ。お前の明るい憂苦の影にも
すぎゆく時が嘆いてゐる。
お前の十五が嘆いてゐる。
お前の十六が嘆いてゐる。
重たい華鬘や珊瑚の花簪の下に
黨やかな十九が嘆いてゐる。
そして、お前のわけしらぬ
なげきの息はふかくなる。

三

時は嘆く。
獸性の草叢の中に、黄蔦の蔭に、
黄楊の矮い並木に、
又秘やかな小川の流に、
時は、水泡の響の中に嘆いてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com